

♪ あ~ あ~ どうにもこうにも止まらぬこの暑さ~♪ 皆さま、いかがお過ごしでしょうか?

早いもので、なんだかんだのうちにイコラ創刊からもう4年目となりました。ふり返ってみれば、子どもたちを取り巻く環境(制度や社会的な意識など)の変化を受け、会としての活動の範囲や役割が大きく変化してきた3年間でしたね。会の動きを何とか皆さんに伝えたくて、「とりあえずやってみようか~」と始まったイコラです。会とともに成長できているかどうかは別として(②)、うれしいことに「イコラ=ニュースレター」という認識だけは、バッチリ定着してきましたよね~!(*^_^*)

では今回も(※) ハイ!ハイ!ハイハイ!いこいこ探検隊♪いこいこ探検隊♪で、**いこら~!!**

新会長きんご紹介!



自閉症協会和歌山県支部紀北分会会長 藤原清治

この度、紀北分会の会長をさせていただくことになりました藤原です。会長として、協会のために何ができるかではなく、会員の皆さまとともに、子どもたちの自立のために、今、協会としてどう活動していくべきか真剣に考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。



県総会·分会総会&講演会

2005.5.24 県子ども・障害者相談センターにて

いつもセットだった県支部総会と合宿キャンプが、今年度は別々に。この日は、県支部総会に引き続き、紀北分会総会も行われました。役員再編や会費についてなどの議事が進められ、アットホームな雰囲気で、無事終了。

午前中、南紀福祉センター付属病院精神科ドク

ター**宮本知佐子先生**の講演会が「精神科から見える発達障害児の育ち」というテーマで開かれました。とてもわかりやすく、親(特に母親)の立場にたってお話してくださいました。和歌山の会員にとって、宮本ご夫妻、大変たのもしい存在ですよね。

Paae 2

よるななで楽しもう!

料理教室鏦

2月15日(火)



今回初めて参加させていただきました。 私は、料理を作るのが好きなので今回料理教 室の参加がとても嬉しかったです。八宝菜、 肉まん、炊き込みご飯を作りました。色々な 料理法があるものだと勉強になりました。

いつもの気の合う仲間と一緒に食事をしながらお喋りをして、時間が経つのも忘れるほど楽しい一日でした。次の機会を楽しみにしています。 二川良子

家族のつどい py マクドナルド



2月20日(日)河南コミュニティーセンター

今年もたくさんの家族が参加しました。マクドナルドのおねえさんたちといっしょに、おとなも子どももワクワク♪ゲームをいっぱい楽しみました。みんな何を GET したかな~?舜





維演会

〜東南海・南海地震について〜

2月17日(木)和歌山ビッグ愛

講師:県総合防災課防災企画 佐々木真次班長

「必ず来ます」とビデオを見せて説明してくれました。「津波が来るので高所に逃げてください」との指導でしたが、もしも、夜中に地震・津波が来たら、この子たちを連れて走れるのか・・・?「3日分の水も各家で準備しておくと生き残れる」と・・。一気飲みやひつくり返すウチの子なんかはどうなるのでしょう・・?考えただけでもおそろしい・・・。 (津)

おしゃべり茶話会

6月16日(木)中央コミュニティーセンター

幼少・学童・青年組に分かれて、子どものこと、 家族のこと、園や学校・通所・入所している所の話な ど・・話題は尽きません。会のみんなで子どもとお泊 まりで出かけようという企画も出ましたよ~。(津)

***!** みんなでおしゃれなランチを

7月7日(木) お城の前の新しいホテル ダイワロイネットホテル "サンクシェール" にて ヤングママ、ちょっと前まで(?)ヤングママ、合わせて18名参加。おいしいお食事を前に、おしゃべりも弾みました。

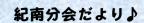
今年も楽しみました』 "社会見学グループ旅行"



紀南分会事務局 濱中洋子

5月3・4日、ゴールデンウィークで一番の人出の中、第10回「親子グループ旅行」を実施。34名が「長島温泉スパーランド」で遊び、ランド内の「温泉ホテル・オリーブ」で宴会・露天風呂つきの**豪華旅行**(?)を楽しみました!!

お天気に恵まれ、この日を待ちかねていた仲間たちは、期待に瞳をキラキラさせながら「特急南紀」の客となり、路線バスを乗り継ぎチェックイン! 休む間も惜しんでホテル専用入り口からスパーランドへ!! とた





んに歓声や悲鳴が降ってきて、気分が一気に盛り上がる。やさしい乗り物めぐりの人、超過激なのが大好きな人、ムードに浸り、もっぱら買い物中心の人・・みんな早速お目当ての場所へ直行です。私たちもジェットコースターやジャンボ・バイキングを 2 回も乗り、キャー! ワーッ! とスリルを味わいました。

たくさんのご馳走が並ぶ「**静かなる(?)宴会**」のあと、子供たちの湯上りを見届けてゆっくりと露天 風呂に・・ 遠くの「ゆあみの島」まで温泉めぐりに行った母さんはだれだっけ??

次の日もお昼まで遊びを満喫したみんなはおみやげを手に手に、大満足で帰途につきました。さて、 来年はどこへ行こうかな??

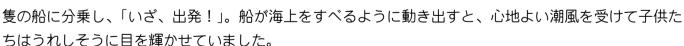
中紀分会だより♪

"クルージング&海水浴"

中紀分会 大久保尚洋

7月17日(日)恒例の「田辺湾ボートクルージングと海水浴」を**わかばの会**と共催でオーナー船長の有志の皆さんのご協力で行い、今年で7回目。

総勢30名と小規模ながら、オレンジ色の救命胴衣を装着して6



当初、予定していた白浜臨海海岸はうねりのため接岸できなかったため、田辺湾内の**畠島**に上陸して、午後2時頃まで**焼きそば**を作って食べたり、船長さんが捕ってきてくれた**小鯵**や**シオ**(ハマチの幼



魚)をつかんで遊んだり、泳いで楽しく遊びました。

船長さんやボランティアの皆さんは、 事故のないように海上で待機しなが ら子供たちが遊ぶ姿をやさしく見守 ってくださっていました。



船長さんやボランティアの皆さ んに感謝しながら、来年もよろしくお願いします。

"自閉症連続講座"始まる!!



"自閉症の理解と生涯支援事業"として、佐々木正美先生の 講演を皮切りに始まった連続講座!〈県支部事業〉 ここにご紹介するのは、**岡潔先生**が詳しくまとめてくださっ た講演の概要を、紙面の都合により編集局(う)でさらに短 くまとめたものです。

自閉症の理解と障害支援 ~基礎1~

2005.7.3 プラザホープにて

川崎医療福祉大学医療福祉学部教授 · 児童精神科医 佐々木正美先生

人は、自閉症のことが分からなかった。自閉症の人は発達の道筋が違っていた。このことは、自閉症本人の発言が多く発表されるようになってきて明らかになってきた。私たちは、見当違いの善意で相手を苦しめてきたのである。

自閉症者は視覚情報に強い。TEACCHは40年前からそう言ってきたが、最近になってやっと周囲の人にも分かってもらえるようになった。自閉症本人が語ることで、周囲も納得せざるをえなくなってきた。ニキ・リンコさん、藤家寛子さんの「自閉っ子、こういう風にできています!」(花風社)では、例えば、子どもの頃、「こたつに入るのが嫌だった」という会話がある。「自分の足がどこにいっちゃったか分からなくなる。こたつから出るのもたいへん。足が見えないからどういうふうに足を動かしたらよいのか分からないから困る」と語っている。私たちには理解しにくいところである。

自閉症者は、**口うるさい人**が嫌いである。ニキ・リンコさんは、「言葉を何のために使うのか分からず不安だった。」と言っている。アメリカの大学院生は、「言葉を集めるだけが楽しかった。人にはあげなかった。ベースボールカードのように。」と述べている。「カードは人にあげればなくなってしまう」という感覚で捉えていたということである。

自閉症者は、**想像力**をもって理解することが 困難である。目で見て確認することが得意である。 英国のローナ・ウイングは、自閉症者のイマジネ ーションの苦しみを強調している。我々は初めて 見る種類の犬を見ても「犬」と言えるのはなぜか。 見たことのない種類なのに犬だと分かる概念はどこから来るのか。我々は、犬の共通点をどこかに感じているのだろう。「**困り感**」という言葉があるが、ニキ・リンコさんは、旧札と新札が二種あるのは苦痛だと話していた。「どっちでもいい」というのが理解できず、切り替わるのがとても不安だったと言っている。自閉症者は、目で見て分かる具体的な概念でないと理解できない。想像力をもてないことで苦しんでいる。また、一度に複数の情報を受け止められない。シングルフォーカスである。ドナ・ウィリアムスさんは、一度に二つ以上の感覚を使えないと話している。自分で話していることを自分で聞くことができない。

予期せぬことは苦痛である。想像力が働かない。特にイベントは苦手で、運動会は災難である。我々は苦労を忘れることができるが、自閉症者は、苦労を忘れられない。アメリカのチャールズ・ハート氏も「見えない病」と言って、「忘れずにいることができる。自閉症者は辛いことを忘れることができる。自閉症者は、フラッシュバックしてよう。だから TEACCH では何事も失敗させないように指導する。失敗の経験は自閉症の人たちを傷つけ続けてきた。多くの大人は、苦難があればあるほど成功すれば喜びも大きいと言う。自閉症者は疑似体験ができないのである。ある自閉症の子は水遊びを止められるとパニックになる。同じことをダウン症の子に言うと「じゃあ次は何をして遊ぼうか」と想像できる。自閉症者には「い

けません」と言うより、「これをしなさい」と**肯定 的に**伝えるようにする。「してはいけません」と言われることは苦しく、いくら言っても同じことをしようとしてしまうであろう。くどくどと叱る人は最悪である。自閉症者の中には相手からの質問をさえぎるために同じことを言ったり喋り続けたりする人がいる。可能な限り肯定的に話をするようにするべきである。

テンプル・グランディンさんは、言葉は第二言語で、一度映像に置き換えると話す。**絵で**考える。絵をつなぎ合わせて考える。絵に変えられない言葉は理解できないとおっしゃる。例えば、「上」や「下」は絵にしにくい。避難訓練で「Under the desk!」の under の意味を理解できなかった。そのとき、先生が来て頭をおさえて机の下に押し込んだ。そして、そのときに「under(下)」とは「窮屈」だと思ったそうである。

スウェーデンのグニラ・ガーランドさんは、ある日カーテン越しに日が差し込んできたときに学校から弟が帰ってくるのを見て、この状態にならないと弟は帰ってこないと思った。しかし、次の日は違った。新しい理論を見出すまで動けなかったと話しておられる。自分の思ったとおり行動したらたいてい叱られたので、人の真似をするでもとをうえたと言う。「私は何でも入れることのでもうなものだ」と。相手が喜んでなれることをしようとすれば自分が自分でなくれることをは苦しい。ひきこもりの人に対して我々はないをうの思いばかり伝えようとしていたのではないだろうか。自閉症者の思いを伝えることをしていない。福島県で講演した時に、演題を「伝えることをしている。福島県で講演した時に、演題を「伝えるこ

とより耳を傾けること」としてもらったことがある。まさにこのことが大切である。

TEACCH は自閉症者を幸せにするためにある。 英国のウイングさんは、自閉症者は、**時間と空間** の中に自分を置くことが難しいと話している。時間の概念は理解が困難だし、空間に意味を持たせることも難しい。学校の教室は、時にはプレイ・ルームになり、ある時はスタディ・ルームとなる。できたら場所をはっきり分けてあげることが望ましい。視覚的物理的構造化ということである。北海道教育大学附属養護学校函館分校では、給食時にスタディ・ルームの机にランチョンマットを置くことで、給食を食べるための食堂に変えるというアイデアを用いている。

ノースカロライナでは、パニックという不適 応行動を町で見かけることがない。わけのわから ない状況を作らないからである。パニック状態の とき、どんな優しい言葉で声をかけてもこれは一 方的な思いであり、**ただの雑音**に聞こえてしまう。 自閉症の人たちから健常者の文化・世界に入って いくことは困難が大きい。だが、健常者が自閉症 者の文化・世界に近づくことはより可能である。 心理学者のパトリシア・ハウリンさんが、講演で 「もしあなたが、自分の周囲の出来事の意味が分 からず、要求の伝え方が分からず、状況や環境の 見通しが見えず、そこから脱出する想像力も働か なかったらどうしますか?」と語っている。

和歌山でも自閉症・発達障害センターができると聞いている。少ないスタッフで県下全域をフォローすることはできない。みんなでセンターを育てつながっていくことが大切である。

〈連続講座第2弾〉ボランティア養成講座&救命

2005.7.10 和歌山ビッグ愛

講師: 岡 潔先生(和大附属養護学校教師)「"Volunteer" ~いま、自分にできること~」 "その人が必要とする援助の量は人それぞれ違うけれど、援助を受けられたら、その人なりの自立、社会参加は可能なのだ・・・ 地域社会にどんどん出ていって生きることもできるのだ・・・ と感じることができて、元気が出ました。"

講師:救急救命士(和歌山市消防局南消防署)救急処置の実技講習 (感想:橋本正美さん)

"夏休みの学童保育を目前に講習が受けられてよかったです。"

NHKN-1.74-54 in WAKAYAMA!!

"ネットワークで考える特別支援教育"をテーマに

2つの講演&シンポジウムが行われました。

松本眞裕美さんに感想を寄せていただきました。

田中康雄先生のお話をうかがって一番心に残ったのは、「人を労う」という言葉です。先生のお話の中に、親が教師に、教師が親に、または同僚に対して、相手を批判する前にまず「大変だね、ご苦労様」とねぎらいの言葉をかけましょう、というのがありました。誰だってねぎらいの言葉をかけてもらうと嬉しいです。自分のことを認めてもらえてるんだと思って嬉しいですから、ねぎらいの言葉がけは、人と人とが信頼関係を結ぶ上でとても大事な言葉だと思いました。

そして親も教師も一緒になって、子どもたちを支援していくときに、忘れてはならないことがあるということも話されました。それは今、本や雑誌、ネット上等で、障がいに関する情報は簡単に手に入れることができるようになったけれど、自分の目の前にいる子、その子のことについて書かれた本はどこにもないということです。

私たちは、本や雑誌の情報をうのみにして支援しようとするのではなく、目の前にいる子の日常をよく見て、そこから情報を得て、支援の方策を考えていかなければなりません。その子を「〇〇障害の子」と一般化してとらえるのではなく(一般化してとらえると「きめつけ」「思い込み」が生じてしまいがち)、一人の人間として「〇〇ちゃん」のことを深く知ろうとしなければならないのだということを私たちは忘れてはならないと思いました。

午後からの特別支援教育に関するシンポジウムでは、 教育と医療と福祉、そして地域住民との連携がとても大切 であるというお話でした。

教育の枠内においても、一人の子どもが保育園・幼稚園・小学校・中学校、そして高校・大学と教育を受けていく中で、納税者として自立していくための教育が、ぶつ切りではなく一貫して行われなければならないというお話がありました。全くその通り! 和歌山も早くそんなふうになればと思います(*^-^*)

2005.6.19 和歌山県民文化会館

の困難性を超えて」連携・ネットワーク「特別支援教育と



田中康雄先生

(北海道大学大学院教授・児童精神科医)



「個別の教育支援計画の策定と展開」

シンポジウム「今後の特別支援教育の展開」



三反田和人先生(はまゆう養護学校校長) 米川徳昭先生(ふたば作業所所長) 渡邊典子先生(障害者職業センター) が加わってのシンポジウム。 (司会は、宮本聡先生)



準備、受付、案内、書籍販売など、多くの 会員スタッフも活躍しました♪

Page 7

岡先生のワンポイントアドバイス⑥

自閉症へのアプローチあらかると

和歌山大学附属養護学校 岡潔



1943年にアメリカの児童精神科医レオ・カナーが自閉症に関する論文を発表して以来60数年、自閉症児に対して、いろいろな支援方法が生まれました。○○療法、△△法等々、自閉症へのアプローチが流行の様に次から次へとブームとなり、今なお、家族の方や専門職の方がいろいろな情報に振り回されているのではないでしょうか。

家族の心配は、コミュニケーションがとれない、遊びが広がらない、集団になじめない、こだわりが強いといった点に集まっています。DSMーIVなど自閉症の国際的な診断基準が定着し、自閉症の早期発見率が上がってきましたが、自閉症の原因はまだ解明されていません。診断後、次にこの子に何をしていったらよいのかということが家族の最も知りたいところとなっています。また、教育現場においても、自閉症は他の分野の障害児教育に比べて、障害のとらえ方がまちまちであり、より効果的な指導法を模索しているところではないでしょうか。

治療といっても自閉症を治す魔法の薬は存在しません。自閉症に対してのアプローチがこの60年の間にずいぶん海外から入ってきました。遊戯療法、音楽療法、薬物療法、生活療法、言語療法、アニマルセラピー、抱っこ療法、感覚統合療法、行動療法、インリアル、など列挙するときりがないほどありますね。日本産としては、受容的交流療法、太田ステージ、動作法などもどこかで聞かれたことがあるのではないでしょうか。ここ20年を見ると、世界でも最も包括的な援助サービスとして評価の高いのがTEACCHプログラ

ムです。構造化や視覚支援など自閉症の特性に応 じた支援で知られているTEACCHですが、自 閉症に関わる人にはぜひ、アイデアだけではなく 理念から勉強していただきたいと思います。また、 応用行動分析(ABA)も正しい行動に導いてい くためによく活用されますね。特に、子ども達の つまずきを見つけるための課題分析はぜひマスタ ーしたいものです。コミュニケーション支援とし ては、拡大・代替コミュニケーション(AAC) は忘れてはならないでしょう。できることを使っ てという発想の転換が本当に求められていますね。 具体的には、PECS(絵交換式コミュニケーシ ョン・システム)やエイド(VOCA)を使った コミュニケーション支援、サイン言語など学校現 場でも広く使われてきています。最近では、自閉 症の対人関係の障害に注目して、ソーシャルトレ ーニング(SST)やペアレントトレーニング、 「心の理論」訓練、対人関係発達指導法(RDI) といったアプローチも注目されています。発達の 過程をおさえておくことはとても大切です。

自閉症児は早く適切な支援を受けることで、自立を促がし社会適応も随分よくなってきます。家族の方には、目移りするくらい情報が氾濫していますが、子どもにあったものだけをチョイスしていくというスタイルでよいと思います。気をつけていただきたいのは、理論などを十分学べていないのに〇〇法はあかんよなぁなんていう批判をすることはやめましょう。また、A君にうまくいったものがそのままB君にも使えるとはかぎりません。やはり、一人一人のアセスメントとオリジナル支援を大切にしていきたいものですね。

自閉症児者を取り巻く最近の状況について

待望の発達障害者支援法が本年4月より施行され、「自閉症・発達障害支援センター(仮称)」の設置に関する予算が県レベルで採択されました。国の予算についても準備が進んでいるところです。また、県下各地でモデル事業開始のための準備も、県や地元教育委員会関係者で着々と進められています。同支援センター、自閉症協会、地域ならびに関係団体などとのネットワーク作りが重要なポイントとなります。

また、昨年来、お願いしていた和歌山市との対話集会にのは選出、〆木佳明和歌山市議、井上



連携の必要と、各種施設や制度の円滑な利用などについて話し合いました。

自閉症協会和歌山県支部長 大久保尚洋

一方、本年1月国会に 提出された「障害者自立支 援法案」では、応益負担と いう名の定率負担が障害 児者に襲い掛かり、障害の 重い人ほど負担が大きく なります。つまり、今まで は毎月1万円の収入を得



ていたのが来年1月からは差し引き1万円払わなければ授産施設や作業所に通えなくなる等、障害者の自立どころか逆に自立を阻害する内容となっています。和歌山県からは木村知事名で、厚生労働大臣宛に、関係者や保護者から意見聴取してまとめた意見書を提出しました。法案は、多くの障害児者や保護者、関係者が反対する中、先日、衆議院で可決され、今後、参議院で審議されることになります。

以上、雑駁 (ざっぱく) ですが最近の状況です。

THE COURSE OF SHEET AND SH



新会長&フレッシュな役員さんを迎え、今年度も元気にスタートを切りました。行事もたくさん企画していきますので、皆さま、お誘い合わせの上ご参加くださいね。バザー商品も今から受け付けていますので、こちらの方もどうぞご協力よろしくお願いします。

(事務局) 计野知津

編集後記: 原稿をお寄せ下さった皆さま、どうもありがとうございました。しかしながら、スペースの関係上、バッサリいかせていただく場合もありました。特に、支部長、"半分になっちゃったんですから!残念! イコラ編集局、切腹~!!" (汗)・・・でも、これに懲りずまたお願いしますね~!

編集スタッフ: (学)津田弘美

(金) 藤原昌子

(②) 辻野知津

(金)佐々木峰子

◎植野比呂美

《発行》イコラ編集局(連絡先)植野比呂美

◆ イコラ№.7の Web 版も出しています。絵や写真などカラーで見られるので、ぜひごらんください。また、創刊号からのバックナンバーも(古い号は白黒ですが)入れています。